

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第 159 回 何時まで続く？ 「象徴的貧困」

2006.7.23

最近変な傾向が顕著になった。日本人が皆同じ考えと同じ顔をしている。たとえば、小泉自民党人気、ホリエモンブームとその凋落ぶり、サッカーのワールドカップで国民の熱狂振りとその落胆振りも、何か皆同じ動き方をしているように見える。どうしてみんな、一つの方向にああも流れてしまうのだろうか？ まるで画一化されたロボット集団を見る思いであり、誰もが同じ感想や意見しかもてなくなっているような気がしてならない。

絶対的異論はあるにしろ、アバウトに言ってしまうえば、実質的に同一宗教、同一言語、同一民族が我国である。世界的に見てこんな国こそ稀有な存在である。従って本来的にマスの行動をとりやすく、心理的にもほぼ同胞意識がある。が、それにしても、あまりにも不注意にマスコミに踊らされ、メディアの情報に振り回されている。IT化の進展に伴い、苦勞せずに入ってくる情報やイメージ、映像が溢れる現代社会で、過剰な情報やイメージを自ら消化しきれなくなった人間が、貧しい判断力や想像力しかもてなくなってしまった...そんな状況を露呈している。

こんな状態を「しょうちやうてきひんこん象徴的貧困」と言っている。(フランスの哲学者ベルナル・スティグレルが使い始めた言葉で、メディア学者の石田英敏東京大教授が訳語をつけた) 石田氏も「メディアが創り出す気分に人々が動かされがちな日本の現実にこそ、ふさわしい」と述べている。(朝日新聞『思想の言葉で読む 21 生氣論』シリーズより 2006.6.14)

最近のテレビを見ると、どの局でも同じような画面で、同じような内容を流している。それはどのメディアも、同じ数量化された商業主義的な枠組みの中で情報を扱っているからに他ならない。つまり視聴率万能主義の、思想を哲学もない低俗メディアに徹し、視聴者も知らずうちに慣れきってしまった。多少嫌悪を感じる人は、マスから離れ、インターネットに没頭しだす。しかしこの世界も、下手すると一種独特の「オタクざ」は拭い切れず、要は、いつも自分にとって快適な情報だけに囲まれてしまう恐れがある。メディアの多様化とは逆に、人間の精神面では寧ろ画一化が進んでいると言っても過言でない。

本来我々の能力は、様々な情報を自分なりに分析し、判断して、自分はどうか、どう対処していくか等を創造していく力があつた。心地良い情報だけを鵜呑みにし、ちょっとでも困難にぶつかると、嫌だ、やってられない、つまらん...と周りのせいにしたたり、言い訳を言ってみたり、つまり現実からの逃避に走ってしまう。

今、こんな時だからこそ、過剰な情報に振り回されるのではなく、自らの考えに根付いた価値あるインテリジェンス(価値情報)をもつべきである。対比の価値観、反対意見こそ、相手が見えてくる貴重な情報。拒絶するのではなく、インプットすべきと言っておこう！